

今日の焦点

スマートフォンの急成長とスティーブ・ジョブズ氏の逝去

携帯電話の世界ではスマートフォン（ここでは略してスマホと言う）の普及が急速に加速しており、今後携帯電話は、スマホが中心に伸びていくものと予測されている。米調査会社ガートナーの報告によれば、2010年の携帯電話の世界販売台数は前年比32%増の15億9,680万台となっている。そのうちスマホは約3億台であるが、その伸びは前年比72%と全体を押し上げており、2015年には11億6,000万台と携帯電話全体の約50%を占めることになると予測している。

こうしたスマホ時代を迎えて、グーグルがモトローラの携帯電話事業を買収し、マイクロソフトがフィンランドのノキアと提携するなど、世界規模で業界の再編が起きている。スマホ端末のOSを見ると、アップルは独自で開発しているiOSであるが、サムスン電子はグーグルの 안드로이드を使用している。アンドロイドはオープン型OSとしてサムスン電子を初め多くのメーカーに提供されている。2010年の世界のOS別シェアでは、ノキア独自のシンビアンが1位で、アンドロイドが2位となっているが、シンビアンは急速にシェアを下げている。今年はアンドロイドとiOSが1位、2位を占めることになる。マイクロソフトもオープン型OSであるWindows7の提供を始めており、オープン型OSの競争も激しくなる。

わが国ではどうであろうか。MM総研の発表によれば、2010年度のわが国の携帯電話出荷台数は前年比9.3%増の3,764万台であり。そのうちスマホは855万台で前年比約3.7倍となり、携帯電話全体に対する比率は22.7%とな

った。今後もスマホの市場拡大によって出荷台数は増加することが予測され、MM総研によれば、2011年度の全体的出荷台数は4,050万台、そのうちスマホは1,986万台と49.0%を占めることとなり、2015年度には全体で4,130万台、そのうちスマホは74.0%の3,056万台となると予測している。わが国の携帯端末契約数は2011年3月末で1億912万件、そのうちスマホは955万件で比率は8.8%にすぎないが、2015年3月末には1億2,056万件、そのうちスマホは6,137万件で比率は50.9%と過半数を超えると予測している。

このため、国内通信各社は戦略転換を急いでいる。NTTドコモは11月にも、携帯電話の上位機種を全面的にスマホに切り替えることとし、今年販売する新機種は半分はスマホとし、来年移行、スマホの比率を拡大するとしている。また、今年度のスマホの販売台数を600万台から上積みして800万台超とした。課題はこれまで築いてきたiモードの課金代行サービスをいかに早くスマホに移行するかという点である。ここ当分、ドコモのスマホのOSは殆どアンドロイドとなるが、これはグーグルの製品であり、その開発計画に従わざるを得ない。これまで培ってきたiモードを基本とするカルチャーを大転換することが求められている。

KDDIはスマホへの参入がやや遅れたが、秋にはスマホ6機種を投入するなど、スマホへの転換を加速している。さらにこの9月には、これまでソフトバンクが独占していたアップルのiPhoneを発売することを発表し、10月14日には、新機種iPhone4Sを、KDDIもソフトバ

ンクと同時に発売を開始した。KDDIにとっては、iPhoneとアンドロイドによる他のスマホの販売をどのようにバランスをとるかが課題である。

ソフトバンクは2008年7月にiPhoneの販売を開始して以来、売上げを伸ばしており、本年9月までの18カ月間、携帯の純増台数で首位を維持している。この最大の要因はこれまで独占で販売してきたiPhoneである。しかし、今後はiPhoneについてはKDDIとの競争関係となるので、iPhoneに依存する体制を脱却すべく、アンドロイドを搭載したスマホの販売も開始している。

イー・アクセス、ウイルコムも売上げを伸ばしており、健闘を期待したいが、上位3社がスマホ時代にどのような戦いをしていくのか。特に、iPhoneを持たないドコモとiPhoneで競業するKDDI、ソフトバンクがどのような結果となるか、大変重要な時期にさしかかっているといえる。

スティーブ・ジョブズ氏が10月5日、56歳の若さで死去した。アップルがiPhone4Sを発表した翌日である。ご存じの通り、2007年1月に彼が発表した初代iPhoneはセンセーションを巻き起こし、現在のスマホ時代の礎を築いた。iPhoneのみならず、彼は独自の発想で新製品を次から次へと生み出し、世界のIT業界のみならず、人々の生活を大きく変えてきた。彼の偉大な業績についてはマスコミなどに大きく扱われているので、ここでは触れないが、彼が2005年のスタンフォード大学卒業式で行ったスピーチの最後に締めくくった次の言葉を、我々もしっかりと受け止めておきたい。“Stay hungry, Stay foolish”